

精神と亡霊

門脇 健

序 モグラをめぐる冒険

——ヘーゲルとマルクスを媒介するモグラ——

一 ヘーゲル 『歴史哲学講義』における精神と亡霊

ヘーゲル（一七七〇—一八三二）の思想のキーワードである「精神（Geist）」を理解する上での興味深い叙述が、E・ガンスによって一八三七年に編集・出版された『歴史哲学講義』の序論の最後にある。

世界的な諸民族が互いにどのように関係しているかを問おうすれば、それは、それ自体において全体性を形成するひとつの連続である、ということになるが、しかしこれらの諸民族が連続していく方方には別の関係、概念による内的な関係があるのである。我々はこの内的な関係を把握してはいるが、行動している民族にとっては知られていないものであった。その関係の大きさ、影響力は、その民族にとっては偶然的なもの、外的な必然性としてしか現れなかった。したがって、次に来る民族との接触によってはじめて過ぎ去った民族の精神に光が当たるので

ある。この精神は、公然とは現れないことが多い。フランス人が言うように、地下で(sous terre)こかしこと動き回るのである。ハムレットは、あちらこちらから彼に呼びかける父親の亡霊に呼びかける。「お前は俺にとって勇敢なモグラだ。」というのは、亡霊はしばしばモグラのように地下を掘り進み彼の仕事を完成するからである。しかし、自由の原理が高揚するとき、動揺つまり外へ向けた活動が起こり、精神が働き尽くしていく対象が創出されるのである。自由が未だ不自由なものとして前提されこのような形態とかわることによって、外的な関係・連関が成立するのである。¹⁾(強調は引用者による)

この拙訳において「精神」と「亡霊」と訳されているのは、ドイツ語原文では実はどちらとも *der Geist* (以下ガイストと表記)というヘーゲルのキーワードである。ヘーゲルにとってガイストという言葉は、この箇所では「亡霊」、少なくともハムレットの父親の「亡霊」という意味をも含む言葉であると言うことができよう。

しかし、このガンスによって編集され一八三七年つまりヘーゲルの死の六年後に出版された『歴史哲学講義』は、今度は編集者ガンスの死後、ヘーゲルの息子カール・ヘーゲルによって大幅に改定されてしまう。この改訂版が一八四〇年に出版されたとき、この「ハムレットの父親の亡霊」に言及した箇所は消えてしまった。それ以後のヘーゲル全集における『歴史哲学講義』は、この一八四〇年のカール・ヘーゲルによる版を基にしているため、グロクナール全集版(一九二七年)においても、そしてそれを踏襲したズーアカンプ全集版(一九六九年)においても、ハムレットの父親の亡霊、つまりモグラが登場することはない。また、ホフマイスターがヘーゲルの講義ノートを基にして編集した版(一九五五年)においても登場することはないのである。²⁾

さらに、弟子たちの講義ノートを基にしたヘーゲルの『歴史哲学講義録』が一九八〇年代以降陸続と刊行されているが、そこにもモグラの姿は見当たらない。そのドイツの編集現場からは、ガンスやカール・ヘーゲルの恣意的な改ざん

が指摘されているという³。したがって、このハムレットの父親の亡霊に関する記述もガンスの創作ではないかと疑われるところである。しかし、二〇〇五年、K・フィーヴェークがハインマンという聴講生のノートを基にして編集・出版した『歴史哲学』において、このハムレットの父親の亡霊そしてモグラは、およそ一七〇年ぶりに復活することになる。ハインマンのノートとは、ガンスが一八三七年版の『歴史哲学講義』の編集の際に参考にしたが、その後行方知れずになってしまったものである。そのノートを、フィーヴェークがたまたまブダペストの文書館で別の文献を探しているとき発見したのである⁴。

このノートは一八三〇年、つまりヘーゲルがコレラで急死する前の年の一月八日から翌一八三一年三月二十四日までの「歴史哲学講義」の筆記ノートである（講義自体は四月一日まで続いたらしい）。週日に毎日行われた講義の第十二回目一八三〇年一月二三日の日付を持つノートには、ガンス編集による『歴史哲学講義』からの先の引用箇所に対応する以下のような記述が見られる。

世界的民族の他の民族への関係という点から我々が見ると、多くの民族は世界ガイストの働きにはわずかしか関与しない。最初の民族は、概念の現実における展開の全体を形成する連続体として、時間のうちに現象する。それらの民族が結合し、次々と連続する仕方は、内的に規定されている。つまり、概念にしたがって規定されており、それを我々が把握するのである。民族自体はそれを偶然と捉え、その結果別の民族が侵入しすべてを破滅させる。これらの民族は、あるときは外的に関係し、あるときは関係しないこともある。ペルシアとギリシア、ギリシアとローマ、ローマとゲルマンは外的に関係したが、内的にも関係している。しかし、中国とインドそしてオリエントは互いになんらの関係も待たないし、時おりの通商がなかったらヨーロッパの諸民族とも関係しない。したがってそこには内的な関係のみがあることになる。地下(soufferte)のガイストが、ここでは働いているのである。ちょう

どハムレットで、ガイストが消えた後も、地下からハムレットたちに「誓え」と呼びかけたように。「お前は立派なモグラだ」とハムレットは言う。このようにガイストは地下で人知れず働いているのである。ガイストが働き尽くしていく物質を創出することで外的な関係が形成される。ガイストにとっては自然が不自由なものとして前提されている。ガイストはこのような形態にかかわり、その関係が外的関係なのである。⁵⁾(強調は引用者による)

このノートとガンス版による記述には、細部や例示においてはかなりの差異が見られるが、民族間の関係に関する「内的・外的関係」の叙述は大筋で一致していると見てよいだろう。そして、その「内的関係」をヘーゲルが「ハムレットの父親の亡霊(ガイスト)」で説明しているのは両者に共通していることから、それはガンスによる創作ではなく、実際にヘーゲルが教壇で述べたことと考えてよい。また、この叙述はホフマイスターがヘーゲル自身の講義ノートからまとめた部分には欠けていることから、この「ハムレットの父親の亡霊」モグラへの言及は、ヘーゲルの即興のジョーク的説明であつた考えられるかも知れない。しかし、それだから価値がないとは断定できない。むしろ、この「お前は立派なモグラだ」というハムレットの科白は、ヘーゲルのお気に入りであつたとも考えられるからである。このことは、ヘーゲル自身もあまり意識していないことであつたかもしれない。というのは、ヘーゲルの『ハムレット』への言及は『ガイストの現象学』や『美学講義』に散見されるのであるが、彼は一度も『ハムレット』をソフォクレスの『アンティゴネ』を分析するように集中して取り上げていないのである。そこには、どこかフロイトの『ハムレット』と『オイディプス王』に対する態度を想起させるものがある。ともあれ、ドイツで刊行されたヘーゲル全集においてこの部分は、一七〇年近くも、地下にもぐってしまっていたのである。またグロクナー版全集を基とした日本語版ヘーゲル全集にいたっては、このモグラは一度も陽の目を見ていない。

しかし、なぜカール・ヘーゲルはこの部分を歴史から抹消してしまったのか。ハインマンのノートを参照できなかった

たからだろうか。しかし、そのノートは、記録によると一八五三年まではベルリンにあったのである。⁶ヘーゲルのキイワードであるガイストを「ハムレットの父親の亡霊Ⅱガイスト」で説明することは、亡き父ヘーゲルの思想を汚すとも、息子カール・ヘーゲルは考えたのであろうか。また、先入観なしに見れば、西洋近代の思想と文学を代表する巨人ヘーゲルとシェイクスピアの出会いという興味深い出来事を、後のヘーゲル研究者がほとんど無視しているというのはどのような理由があるのであろうか。事実、ハインマンのノートを発見しそれを編集・公刊したフィーヴェーク自身、そこにハムレットの父親の亡霊Ⅱモグラが復活していることにまったく注意を向けていない。彼が「講義録」に付した索引には、アンティゴネーやソフォクレスは出てくるが、モグラはもちろんのこと、シェイクスピアもハムレットも出てこないのである。ヘーゲル研究において、このヘーゲルのハムレットの父親の亡霊Ⅱモグラへの言及は、まるで在ってはならない過去として地下に潜ったままトラウマを形成しているかのようなのである。

ところが、この亡霊Ⅱモグラは、意外な場所に顔を出しているのである。「ヘーゲルはどこかで、すべての偉大な世界的事実と世界史的人物はいわば二度現れる、と述べている。彼はこう付け加えるのを忘れた。一度は偉大な悲劇として、もう一度はみじめな笑劇として、と。」⁷と書き出されるカール・マルクスの『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』においてである。果たして、モグラの二度目の登場は、悲劇か笑劇か。しかし、それを見きわめる前に、シェイクスピア『ハムレット』において「ハムレットの父親の亡霊Ⅱモグラ」がどのように出現するのか見ておこう。

二 『ハムレット』における亡霊とモグラ

ヘーゲルにとって、『ハムレット』という悲劇は、イギリス人シェイクスピアが書いた外国の劇ではなかった。ヘーゲルの近くにいたアウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルによって訳されたシェイクスピア全集によって、十九世紀初頭にはドイツ人はシェイクスピアを「我々のシェイクスピア」と呼ぶようになっていたし、ゲーテは『ハムレット』に

触発され『若きヴェルテルの悩み』（一七七四年）を書き、ウィリアム・シェイクスピアのファースト・ネームのウィリアムのドイツ語読みヴィルヘルムを冠した『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』（一七九五年）で、後にイギリスに逆輸入されることになるハムレット観に悩めるハムレットを世に問うていた。また、ヘーゲル自身、彼の思想の誕生地とも言える『ガイストの現象学』（一八〇七年）で少なくとも二度はつきりとハムレットに言及している。このヘーゲルと『ハムレット』との関係は後に詳しく考察することにして、ここでは、『ハムレット』という劇そのものにおいてハムレットの父親の亡霊がモグラとして現れる場面をみておこう。

「誰だ？」という問いで始まる『ハムレット』⁸は、亡霊の登場によって事態が動いてゆく。この亡霊の正体を見きわめようとしたハムレットの親友ホレイシヨは、ハムレットにその亡霊がハムレットの亡き父の姿をしていたことを告げる。その亡霊から、「自分は、自分の弟であり現在のデンマーク王にして、かつての自分の妻ガートルードを妃としているクローディアスに毒殺された」と告げられ、そして「復讐」を命じられたハムレットは、「想念や恋の思いよりも速い翼をつけ一気に復讐へと飛んで行きます」（第一幕第五場）と誓う。亡霊が消えた後、心配して駆けつけたホレイシヨともうひとりの兵士に、ハムレットはこの亡霊のことは他言しないように誓うことを要請する。すると、奈落から亡霊も「誓え」と呼びかけてくる。

ハムレット 今夜見たことは決して他言しない。

この剣に賭けて誓え。

亡霊 誓え。（二人、誓う）

ハムレット 神出鬼没、だな？ よし、場所を変えてみよう。

こっちへ来て

もう一度、剣のつかに手をのせんるんだ。

この剣に誓って

今夜聞いたことは決して他言しない。

亡霊 剣に賭けて誓え。 (二人、誓う)

ハムレット いいぞ、モグラ先生。地下でも素早く動けるんだな？

大した坑夫だ！ さあ、もう一度場所変えだ。

ホレイシヨー おお、なんだこれは、わけが分からない。

ハムレット ならば分かうとせず、そのまま受け入れろ。

なあ、ホレイシヨー、天と地のあいだには、

哲学などでは計り知れないことが山ほどあるんだ。

ともかく、さあ、

ここだ、さっきのように誓ってくれ、

たとえ俺がどんな奇妙な態度を取ろうとも――

つまり、この先必要に応じて

気違いのふりをするかもしれないから――

そんな時、俺を見ても

(中略)

俺について何か知っているそぶりは見せないでくれ――さあ、

そうすれば神のご加護が受けられる。

亡霊 誓え。

(二人、誓う)

ハムレット 鎮まれ、鎮まれ、落ち着きのない亡霊だな。では、君たちくれぐれもよろしく頼む。

このハムレット、今は情けない有様だが、

神の助けがあれば、いずれ君たちの

あつい友情にはきつと報いる。さあ、帰ろう。

唇には指で封印を、頼んだぞ。

この世の関節がはずれてしまった。ああ、何の因果だ。

それを正すために生まれてきたのか。

どうした、さあ、一緒に行こう。

(一同、退場)

【第一幕第五場より】

この最後の「この世の関節がはずれてしまった。ああ、何の因果だ。それを正すために生まれてきたのか。」は、ゲーテが彼の「悩めるハムレット」論を展開するとき endpoint とした科白。「なあ、ホレイショ、天と地のあいだには、哲学などでは計り知れないことが山ほどあるんだ。」という科白は、英語原文の "in your philosophy" を「君の『ホレイショの』」と誤読した藤村操を「ホレイショの哲学何するものぞ」と華嚴の滝への投身自殺に導いた。しかし、ヘーゲルにとっては、これらの科白よりも「いいぞ、モグラ先生。地下でも素早く動けるんだな？ 大した坑夫だ！」(英語原文は Well said, old mole! Canst worki' th'earth so fast? A worthy poioneer!)の方が印象深いものであったのであろう。一箇所しか出てこないこのモグラはヘーゲルの心を捉えて離さなかったのである。

しかし、講義で述べられたハムレットの科白は、ヘーゲルによって相当にアレンジが加えられているようだ。ヘーゲルは、ガンス版では

„Du bist mir ein wackerer Maulwurf.“ (以下、傍線は引用者による)

ハイマンのノートでは

„Du bist ein guter Maulwurf.“

とハムレットの科白を引用する。しかし、ヘーゲルがギムナジウム時代(八歳のころ)に教師から贈られたと伝えられる J・J・エッセンブルク訳のシェイクスピア全集版では

„Wohl gesprochen, alter Maulwurf! Kannst du dich so schnell in den Boden arbeiten? – Ein wackerer

Schanzgräber!“

と訳されており、また当時から決定的翻訳として権威のあったシュレーゲル訳では

„Brav, alter Maulwurf! Wühst du so hurtig fort? O trefflicher Minierer!“

となっている。おそらくヘーゲルは、長い年月『ハムレット』へ関心を向けるうちにハムレットの父親への亡霊の呼びかけの科白を自らの脳裡にヘーゲル流に作り上げてしまい、「歴史哲学」の講義の際には原文やドイツ語訳を直接参照することなく述べたのだろう。

いずれにせよ、地下を自由に動き回りかつ地上の人間たちを自由に操りかつ人間たちに自由に行動させる「理性の狡知」を発揮するガイストに、ヘーゲルは何かしらの共感を持っていたと言えるだろう。『ハムレット』という劇を舞台の下つまり奈落から進行させる力を持ったガイストに、ヘーゲルは関心を寄せたのである。『歴史哲学講義』においてヘーゲルは、どの版でも歴史を「劇」と看做している。そして、ガイストは、その劇を動かし、かつそこに自分を展開し、自分を知って行くものとして登場している。つまり世界史という壮大な劇の作者が、その世界史という劇そのものにガ

イストとして登場するというわけである。『ハムレット』の初演では、その劇の作者シェイクスピアが亡霊つまりガイスト役を演じたという伝説があるが、ヘーゲルがこの伝説を知っていたかどうかは定かではない。

また、ヘーゲルがモグラの動き回る「地下」をガンス版とハインマンのノートの両方においてフランス語で強調していることから、「地下に閉じ込められているガイスト」、「抑圧されているガイスト」というようなイメージを持っていると言えるかもしれない。となると、フロイトの『夢判断』の中の次のような視点からも歴史を考察する可能性が考えられる。

ゲオルク・ブランデスはそのシェイクスピア論（一八九六年）中に、この作品はシェイクスピアの父の死後間もなく（父の没年は一六〇一年）、すなわち父の死を悼む気持ちのなおさめやらぬころに、父に対する幼児期感情（といてもいいだろう）の復活を経験しつつ製作されたものだといっている。また彼の早死した息子の名前がハムネット（ハムレットと同じ）であったことも知られている。

つまり、『夢判断』が父に対する喪の作業を通してのフロイトの自己分析であるように、『ハムレット』という劇はシェイクスピアの父や息子に対する喪の作業としての自己分析であるというわけである。とすると「歴史」あるいは「歴史哲学」とは、ガイストの、あるいはヘーゲルの喪の作業による自己分析ということも言えるかもしれない。というのは、ヘーゲルがその思想的立場を鮮明にした『ガイストの現象学』（ガイスト＝亡霊の出現の学は、彼の身近の多くの人々の死——一七九九年の父の死、一八〇一年のノヴァーリス、一八〇四年のカント、一八〇五年のシラーの死——を受けて、一八〇六／七年に書かれており、かつその中でヘーゲルが直接に名前をあげる悲劇の登場人物がアンティゴネーとハムレットの二人だけ、つまり死者を弔うことをその責務とした二人の主人公だけであったからである。さらに、その『ガイストの現象学』を、ヘーゲルは、「頭蓋骨の場」にたたずみ、シラーの詩を彼流に引用して閉じるのであるから。

三 マルクスにおけるモグラ

ヘーゲルはどこかで、すべての偉大な世界的事実と世界的人物はいわば二度現れる、と述べている。彼はこう付け加えるのを忘れた。一度は偉大な悲劇として、もう一度はみじめな笑劇として、と。

マルクスは『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』をこう書き出すのだが、訳者の植村邦彦によると、この書き出しは一八五一年二月三日（つまりルイ・ボナパルトのクーデターの翌日）付のエンゲルスのマルクスへの手紙を書き写したものだという。その手紙でエンゲルスは次のように述べている。¹⁰

我々が昨日見たところでは民衆はまったく問題にされておらず、実際まるで墓の中の老ヘーゲルが世界精神として歴史を導いて、きわめて几帳面にすべてを二度くり広げさせたかのようだ。一度目は偉大な悲劇として、二度目はみすばらしい笑劇として。（以下略）¹¹

つまり、マルクスはこの『ブリュメール一八日』を「墓の中の老ヘーゲル」に導かれて、あるいは少なくともヘーゲルを意識しつつ書いたということである。植村によれば、マルクスはヘーゲルの『歴史哲学講義』の次の箇所を意識していたという。

そもそも国家の大変革というものは、それが二度くりかえされるとき、いわば人びとに正しいものとして公認されるようになるのです。ナポレオンが二度敗北したり、ブルボン家が二度追放されたりしたのも、その例です。最初はたんなる偶然ないし可能性と思えていたことが、くりかえされることによって、たしかな現実となるのです。¹²

歴史における反復は、「たんなる偶然」を「たしかな現実」に変える。むしろ、この反復によって、歴史が必然性として立ち現れる。ある出来事が忘却されず思い出されることによって、必然性への問いが立ち現れるのである。¹³『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』という題名そのものが、反復による必然性への問いを指し示している。ナポレオン・ボナパルトによる共和暦第八年ブリュメール一八日（一七九九年一月九日）のクーデターが、その甥ルイ・ボナパルトによって一八五一年二月二日に反復されるとき、マルクスはその必然性を問わねばならなかった。それは、「革命の精神（ガイスト）を再発見するためであって、革命の幽霊（Gespenst）を再び出沒させるためではなかった。」¹⁴そして、マルクスは、その「革命」について次のように述べ、「モグラ」を登場させるのである。

しかし、革命は徹底的である。それはまだ煉獄を通過する旅の途上にある。革命は、手順を踏んだ方法で自分の仕事を遂行する。一八五一年二月二日までに革命はその準備の半分を完了したので、今や後の半分をやり遂げる。革命は、それを打倒することができるようにするために、はじめに議会制権力を完成させた（一八四八年の二月革命以降の第二共和制）。今や打倒を達成した（一八五一年二月二日のルイ・ボナパルトによるクーデター）ので、革命は、自分の破壊力のすべてを執行権力（ルイ・ボナパルト）に向けて集中させるために、執行権力を完成させ、それをその最も純粋な表現に還元し、孤立させ、唯一の主題として自らに對置する。そして、革命がその準備作業のこの後半部分¹⁵を成し遂げたとき、全ヨーロッパが椅子から躍り上がって、こう歓声を上げるであろう。よくぞ掘り返した、老いたモグラよ！（括弧内は引用者による補足）

このようにマルクスは「革命」に対して「モグラよ！」と呼びかけている。その「貨幣論」をシェイクスピアの『アテネのタイモン』のある科白の分析から始めたマルクスは、ヘーゲルよりもハムレットの科白を忠実に再現している。「よくぞ掘り返した、老いたモグラよ！」（„Brav gewählt, alter Maulwurf!“）は、シェーラーゲル訳の „Brav, alter Maulwurf!“

Wühlst du so hurtig fort? O trefflicher Minierer!“を未来に向けてマルクス流にアレンジしたものであろう。と同時に、「老いたモグラ」にはエンゲルスの手紙にあった「老ヘーゲル」が二重写しになっている。

このようにして、『ハムレット』のモグラはおよそ二〇年の地下生活の後、思想上に「革命」として復活を果たすのである。ここに私たちは、カール・ヘーゲルによって遂行されたモグラの抹消が、カール・マルクスによって再び抹消されるのを見ることになる。亡き父を尊敬したカール・ヘーゲルと思想上の父を批判し顛倒させたカール・マルクス。その二人のカールという息子によって反復されるモグラに関する「抹消」。すこし出来過ぎた歴史上の「反復」ではあるが。

しかし、現在参照できる日本語訳の注釈は、このモグラが『ハムレット』の第一幕第五場に由来することを示すだけで、そこにそれほど意味を読み込んでいない。気の利いた言い回し以上の意味を読み込んでいないようだ。ところが、このモグラは、今引用したこの段落全体、つまりマルクスの現状分析と革命への展望を示すパラグラフ全体を支配しているのである。なぜならば、この段落の冒頭に、「徹底的な」(gründlich || 地面から掘り返すような)「革命」は「まだ煉獄を通過する旅の途上」と述べられているが、「煉獄」とは非業の死を遂げたハムレットの父親の亡霊 || ガイストが未だとどまっている場所だからである。ハムレットに「聞け」と命令しながら亡霊は自分の身の上を告げる。

刻限がせまっている。

間もなく煉獄へ立ち戻り、硫黄の業火に

身をさいなまれねばならない。

【第一幕第五場】

つまり、この「革命」は、この段落の最初からハムレットの父親のガイストのイメージで描かれているのである。し

たがって、主語としてはいささか意味のとりにくい「革命」は「革命のガイスト」と読むと、理解が容易になる。しかし、そうなるとこの革命の歴史と展望は、ヘーゲル的なガイストの自己展開と重なってしまう。おそらく、そのことを意識して、マルクスはガイストの語を避けたのであろう。しかし、マルクスにとって革命は常にガイストの働きであった。なぜなら、革命を忌避する人びとには、それは妖怪 (Geistes) として現象するのであるから。

しかし、これだけでは、シェイクスピア通のマルクスが、たまたま『ハムレット』から「モグラ」を引用したに過ぎず、私たちが最初に見たガンス版『歴史哲学講義』に登場するヘーゲルのガイストハムレットの父親の亡霊ハムレットとは直接の関係は見出せない。ところが、このモグラハムレットの父親がマルクスの思考上に登場したのは、これが最初ではないのである。一八三九年ごろから取り組まれたと伝えられるマルクスの学位論文「デモクリトスの自然哲学とエピクロス其自然哲学の差異」の準備ノートに既に登場しているのである。マルクスはその学位論文の冒頭でヘーゲルを次のように位置づけている。

たしかにヘーゲルは一般的な形ではあるが、これらの(エピクロス派、ストア派、懐疑派とつづく)哲学全体について適切な規定を示している。そもそも哲学史というものは、ヘーゲルの哲学史から始まったのである。ただしヘーゲルの哲学史の驚嘆するほど巨大で大胆な見取り図では、個々の哲学者の思想を掘り下げることができなかった。さらにこの偉大な思想家の思想が妨げとなって——ヘーゲルはこの思想を思弁そのものと呼んでいた——、これらの哲学体系が、ギリシア哲学の歴史とギリシアの精神そのもののうちで、どのように傑出した意味を持っているのか認識できなかったのである。¹⁶(括弧内は引用者による補足)

マルクスは、一八三七年十一月一日付の父親への長い手紙には「健康をそこねておりました間に私はヘーゲルを初めから終わりまで、その学派の大抵の者の「著作」ともども学び知るようになりました。」¹⁷とベルリン大学での勉学の様

子を記している。そして、大学では、ヘーゲルの『歴史哲学講義』を編集・発刊したばかりのガンスの講義を「際立つて熱心」に聴講していた。¹⁸ マルクスは決してヘーゲルを外から批判したのではない。むしろ、マルクスは、ヘーゲルの「思弁」的な特質を、ヘーゲルそのものを学ぶことによって超えようとしていたのである。

そのようなマルクスのノートに例のモグラが「現象学的意識」とともに登場するのである。それは哲学史の記述をめぐる次のような文章である。

哲学的な歴史記述は、たとえそれが哲学者の精神的な人格であったとしても、人格をあたかもその哲学の体系の焦点・形態として捉えることに関わるべきではない。ましてや、心理的な些事や賢しら事の詮索にかかわるべきではない。むしろ、哲学者たちの得意の分野のお喋りや叙述に現れる証明や正当化から、それぞれの体系における諸使命・一貫した現実的な結晶を分離せねばならない。歴史の展開の容器でありエネルギーである主体の現象学的意識の公での場でのお喋りやさまざまな身ぶりから、現実的な哲学的知である黙々と作業し続けるモグラを分離せねばならないのである。¹⁹

歴史の表面でお喋りを続ける「現象学的意識」と地下で黙々と作業し続けるモグラを代理表象とする「現実的な哲学知」。それは、私たちが、最初に見たガンス版の『歴史哲学講義』おける、表面に現れた民族間の「外的関係」とモグラのように地下で作業するガイストが形成する「内的関係」にぴったりと重なる。となると、このモグラである「現実的な哲学知」とは、ヘーゲルにおけるガイストに他ならない。²⁰ そのモグラが、この学位論文の準備ノートから一三年後に『レイ・ボナパルトのブリュメール一八日』に復活するのである。マルクスは、自分で考えている以上にヘーゲルの忠実な弟子であったのかもしれない。

このように、ハムレットの父親の亡霊であるモグラは、マルクスのヘーゲル批判というヘーゲルとマルクスの「外的関係」の地下で、それとは別の「内的関係」であるガイスト的な脈を黙々と掘り進んでいたのだ。しかし、そのモグラの正体を見きわめることは、私たちに可能なのだろうか。モグラは、地下にいてこそモグラである。モグラを太陽の下で見きわめることは不可能なのではないか。実際、私たちの中のどれほどの人びとがモグラを直接に見ているだろうか。私に限って言えば、モグラの地下活動の徴候にはいく度も接しているものの、モグラそのものは見たことがない。ヘーゲルにせよ、マルクスにせよ、モグラを直接に見たことがあったのだろうか。名前は知られているが、実物は知られていないというモグラの在り方は、ガイストの在り方に、見事なまでに重なっている。このモグラという表象は、その印象的で親しみやすいイメージとは裏腹に、私たちに想像以上に困難な問いを突きつけているようだ。

(この稿は二〇〇四年度大谷大学真宗総合研究所・一般研究の報告の一部である。続稿は別に発表する予定である。)

注

- 1 *Georg Wilhelm Friedrich Hegel's Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte*. Herausgegeben von D. Eduard Gaus, Berlin, 1837, S. 84.
- 2 筆者はこの箇所存在を Otto Pöggeler, *Hegels Idee einer Phänomenologie des Geistes*, München, 1973, S. 387 の注から教えられた。
- 3 加藤尚武編『ヘーゲルを学ぶ人のために』世界思想社、二〇〇一年、一四七ページ参照。
- 4 K. Vieweg (Hrsg.) *Hegel Die Philosophie der Geschichte*, München, 2005, S. 24.
- 5 *Ibid.* S. 56f. ただし、段落は無視して引用・翻訳した。
- 6 *Ibid.* S. 24.
- 7 カール・マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』植村邦彦訳、太田出版、一九九六年、六ページ。

- 8 『ハムレット』の翻訳は松岡和子訳『ちくま文庫版シェイクスピア全集』版(二〇〇四年第六刷)を使用する。ただし、ドイツ語訳との関係で、多少補足・改訳することがある。
- 9 フロイト・高橋義孝訳『夢判断・上』、新潮文庫版、一九六九年、三四三ページ。
- 10 マルクス・植村訳『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』六ページ注。
- 11 同前。
- 12 同前、翻訳は植村が引用している長谷川宏によるもの。岩波文庫、一九九四年、一五一―五二二ページ。なお、この部分のドイツ語原文は、ガンス版もカール・ヘーゲル版つまりグロックナー版も、そしてフィーヴーク版もまったく同じである。
- 13 内田樹は反復による「謎」の成立についてラカンの説を次のようにまとめる。「ゲームが二回続き、二度続けて勝つか負けるかすると、そのとき、人はそれと知らないうちに、『象徴界』に足を踏み入れている。」(内田樹『他者と死者』海鳥社、二〇〇四年、七七ページ)とするとヘーゲルにとっての「歴史」とはラカンの言う「象徴界」ということになるだろう。
- 14 マルクス・植村訳、前掲書一〇ページ。
- 15 同前、一七七ページ。
- 16 カール・マルクス「デモクリトスの自然哲学とエピクロスの自然哲学の差異」、中山元訳、『マルクス・コレクション I』所収、筑摩書房二〇〇五年、八ページ。
- 17 廣松渉『青年マルクス論』平凡社、一九七一年、七二ページ。
- 18 同前、五九ページ。
- 19 Karl Marx Friedrich Engels *Werke Ergänzungband Schriften-Manuscripte-Briefe*, 1968, Berlin, S. 246. の箇所については、
Otto Pöggeler の前掲書の同じ注に示唆されている。
- 20 ここでもうひとつ興味深い問題がある。この学位論文準備ノートは、マルクスの父親が一八三八年五月に死去し、その後、進路や結婚の問題で困難に直面している中で、あるいはそれに決着をつけた後で書かれているらしいという事実である。つまり、マルクスが父をいかに弔ったかという問題と何らかの関係を考えることができるということである。ハムレットの父親の亡霊IIモグラがマルクスにとってどのような意味を持っていたかという問題である。